

五島列島・樺島における点在集落の歴史

—脱カクレキリシタン史の視点—

佐藤 智敬

目次

一、はじめに

二、五島列島・樺島

三、点在集落の前近代

(一) 樺島の史料

(二) 漁民の居住

(三) 中国、朝鮮との関係

(四) 大村からの移住民

四、点在集落の近代

(一) 五島列島におけるキリスト教の発見

(二) ソコソコ宗徒としての点在集落

(三) カクレキリシタン研究と樺島点在集落

(四) 地下集落とのかかわりとその変化

(五) カクレキリシタン組織の解散

五、おわりに

一、はじめに

長崎県、五島列島・樺島には、「点在集落」と称される複数の小集落がある。この集落はかつて「ヒラキ(開き)」ないし「イツキ(居付)」と呼ばれ、樺島の様々な地区に、数軒ずつ文字通り点在しており、島の中心集落とは異なる生活様式を持つとされる。本稿ではこれまであまり明らかにされることのなかった点在

集落の変遷を辿つてみたい。

五島列島全体の歴史から見れば、彼らは五島各所に広く分布し、近世禁教時代に端を発する潜伏キリシタンの末裔とされる。これまでキリシタン研究の視点では、樅島に限らず、福江島、奈留島、前島、中通島、若松島、久賀島などの多くの五島の島々を対象として、その歴史、宗教観、信仰生活などが注目されてきた⁽¹⁾。中心となつた視点は主に潜伏、復活、迫害の歴史、人生儀礼にまつわる部分の把握、伝承や祈りの言葉とカトリック信仰との差異の分析などであつた。しかし五島列島における彼らの生活については、回顧録などで各地の昭和期のそれを多少うかがい知ることはできても⁽²⁾、集落を基点とした、組織や生活の変容について言及するものは少なかつたといえるだろ⁽³⁾。

筆者は点在集落の人々をキリスト教との関連のみでとらえるだけでなく、それを含めた多様な信仰、生活様式の複合としてとらえる必要があると考えている。その視点の確立のためにも、そもそも樅島の点在集落がいかになりたち、現在に至つてはいるかを知る必要がある。そしてすべてがキリスト教の文脈で捉えられ

るものではないということを確認する必要があると思われる。

平成十年（一九九八）度から、成城大学民俗学研究所において研究プロジェクト「沿海諸地域の文化変化の研究——柳田國男主導「海村調査」「離島調査」の追跡調査研究——」が実施された。これは柳田國男主導で行われた「海村調査」（昭和十二～十三年実施「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査」）、「離島調査」（昭和二十五～二十七年実施「本邦離島村落の調査研究」）対象地のうち計十五ヶ所について、当時の調査記録をもとに、かつての調査時をゼロポイントとしてその変化を追跡する調査研究プロジェクトであつた。樅島は「離島調査」の調査対象地（昭和二十五年・竹田旦調査）であり、追跡対象地のひとつとなつた。その成果の一端は、村田裕志によつてまとめられている⁽⁴⁾。しかし点在集落についての把握は、竹田旦による「離島調査」時からそもそも多くはなかつた⁽⁵⁾。また、当時の採集記録が調査時の現状を記録したものと断定しづらい部分もある。ゆえに「離島調査」時をゼロ・ポイントとしてその変容を追うことには限界があ

る⁽⁶⁾。そこで、本稿では点在集落について、変化のゼ

ロポイントは設けず、変化の過程を伝承史料やファイ
ルドワークの成果から、可能な限り再構成することを
試みている⁽⁷⁾。

二、五島列島・桟島

桟島は、五島列島で八番目に大きく、平地の少ない
島で、平成十四年現在主生業は漁業（一本釣・延縄）
である。戦後間もない「離島調査」実施時期（当時は
大型船によるアグリ網漁業中心）は、南松浦郡樺島村
として、一島一行政村であった。昭和三十二年（一九
五七）、隣島福江島の福江市に編入合併され現在に至っ
ている。島名は以前から「桟」と略記されることは多
かつたようだが、この頃に西彼杵郡野母崎の樺島と混
同されぬよう、樺島と表記を改めている（本稿では、
福江市編入以前は「樺島」、それ以降、および総合的
に島について論じる場合は「桟島」と表記している）。
現在の福江市もさらなる合併問題が進行中であり、平
成十六年（二〇〇四）には近隣の町と合併し、五島市

となることが予定されている。

桟島は近世、富江藩領の小規模村であり、明治二年
(一八六九)には全島で七八〇名程度の島民がいた。
その後、漁業基地として人口は急増し、大正、昭和初
期には二〇〇〇人台、戦後すぐのイワシ網景気の影響
もあり竹田亘の調査時には六九八世帯、三三〇六名の
人口を有していた。しかしその頃をピークとして徐々
に人口は減少し、平成十四年九月現在、一六二世帯、
二八四名（本窯六二世帯・九四名、伊福貴一〇〇世帯・

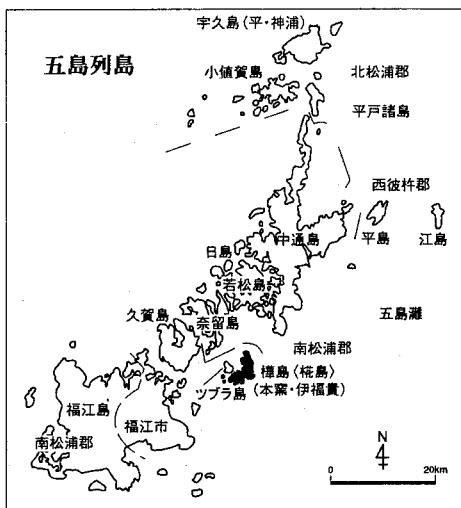


図1 五島列島

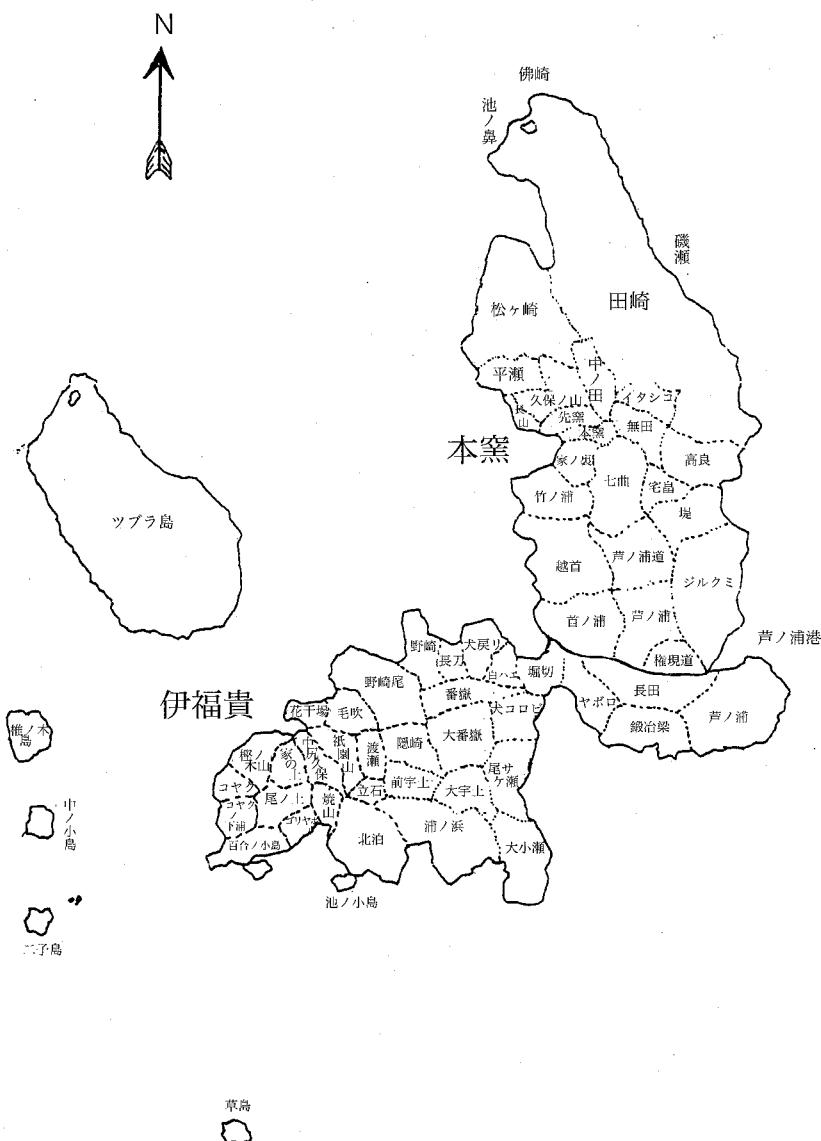


図2 桧島地区字位置図

一九〇名）という構成である。筆者らが桟島の追跡調査をはじめた平成十年（一九九八）五月末は一六七世帯・三一二名であったので、四年間で五世帯・二八名減少していることになり、人口は現在も減り続けている過疎の島ということができよう。

行政組織は、本窯（もとがま）、伊福貴（いふき）という二つの大字（郷）で構成される。本窯、伊福貴それぞれの港を中心に、仏教徒（多くは浄土真宗）を中心として構成される「集落（郷）」がある。距離自体はさほど離れていないが、本窯は先ノ組、中ノ組、村ノ組に（現在、中ノ組は村ノ組に吸収されている）、伊福貴は先聿（しんじゆく）、中聿、向聿に分かれている。

そのほかに二つの郷それぞれの山間部および中心集落以外の海岸沿いに、文字通り点在する「点在集落」がある。本窯郷では前海組（まえみや）、後海組（うしろみや）、田崎組の三組があり、伊福貴郷には前海組、後海組の二組があつた。この前海組、後海組の称呼は郷の中心部からの距離に由来しているようである。本窯郷に属するのは竹ノ浦・越首など（前海組）、芦ノ浦など（後海組）、田崎など（田崎組）、伊福貴郷に属するのは野崎・長刀・毛吹など

（前海組）、首ノ浦・永田（地籍上は長田）など（後海組）、であった。ただし、両郷の境界に位置し、地籍では本窯に属する首ノ浦住民は伊福貴郷に、伊福貴に属する芦ノ浦住民は本窯郷の町会に入っている。しかし現在、行政組織としては、からうじて芦ノ浦集落のみが独立し、ほかはそれぞれ本窯、伊福貴の町会に吸収されている。

人口の割合としては、

変わることなく地下集

落が圧倒的に多い。点

在集落は現

在、桟島全

体で約二〇

軒にまでそ

の数が減少

している。

そして大半



写真1 芦ノ浦集落
平成14年3月 筆者撮影

の世帯構成員は六〇歳以上の高齢者である⁽⁸⁾。

三、点在集落の前近代

(二) 樺島の史料

樺島の歴史を考察しうる文書史料は、代官を務めていた本窓の桑原本家の他島への転出、火災、福江市への編入合併による混乱、福江市街を焼き尽くした昭和三十七年（一九六二）九月の福江大火等により、その

大半が失われている。また、明治元年（一八六八）のいわゆる富江騒動によつて福江藩に吸収されるまでは、福江藩の支藩の富江藩領であつた。富江藩の史料自体、多くが散逸している。福江藩史の文書史料の大半に姿を見るものはわずかである。

しかし、焼失、散逸以前の貴重な文献をまとめた中島功編による『五島編年史』、維新以降の明治四十年（一九〇八）に記された伊福貴の桑原本家の系譜である『桑原家系譜録』、大正八年（一九一八）に著された『南松浦郡樺島村郷土誌』等に記された伝承など、残存する数少ない文書史料を使用するとともに、

聞取りによる
伝承史料、墓
石や神社の奉
納物等からそ
の姿を復元で
きないだろう
か。

近世以前の

樺島のくらし、
歴史を記す文
書史料はやは
り少ない。本

村についての

史料ですら少ないのであるから、点在集落についてはなおさらである。さらに点在集落では、近代まで墓に石塔・墓誌を立てなかつた。位牌も死後三十三年を過ぎると墓地に安置・処分してしまることが多い。ゆえに先祖祭祀から彼らの歴史を追うことは困難である。伝承史料には不確定な部分が多いことは否めないが、出来うる限りの史料批判を前提としつつ、近世の点在



写真2 芦ノ浦・本窓間の点在集落の廃屋
平成12年10月 筆者撮影

集落部の一側面を再構成してみよう。

樺島は製塙を主生業とする竈百姓を主体とした島であり、本窯を拠点とした代官の桑原氏によって統治されていた。伝承としても、広大な土地を所有し、様々な特權を持つていたヤッショ（役所・本窯の桑原本家のこと）と呼ばれる旧家があつたとされている。

樺島の開祖とされる桑原家は、平家の落人、平重衡の息、伊王三郎が承元四年（一二二〇）、芦ノ浦、もしくは田崎の池ノ鼻と呼ばれる場所に上陸し、桑原甚吾左衛門を名乗り、後に本窯に住み着くことになったという。伊福貴の祖とされる桑原氏も、本窯の桑原家よりの分流であるとされている⁽⁹⁾。あくまでもこれらの伝承は近代以降に再編されたものであるので、真偽のほどは定かではない。しかし、平家の落人にして開発の祖・桑原家という伝承は現在でも地下、点在双方でも語られている。そしてその中に芦ノ浦、池ノ鼻といつた、点在集落と思しき場所を経由したことを説いている点は興味深い。

（二）漁民の居住

近世、樺島は樺島掛に属し、寛文元年（一六六一）に富江藩の設置とともに富江領となり、これにともない北樺島村、南樺島村の二村となつた。明治初年に合併し、樺島村となるまで、その状態が続いた。

少なくともこの時期には、五島列島全域には、瀬戸内海域等から漁民や商人が多く往来していたとおもわれる。宇久島や久賀島、日島等にはそれらの伝承が残るほか、彼らの子孫と思われる屋号を持つ家がみとめられる場合もある。樺島もまた同様に彼らの往来をうかがわせる⁽¹⁰⁾。

後期の文化九年（一八一二）にこの地を測量のために訪れた伊能忠敬の日記には次のような記述がみられる。

同（六月 筆者注）二十日 朝曇次第に晴。六ツ後樺島本竈出立。⁽¹¹⁾ 同島内字磯浜初、此より海岸大絶壁、小河原、竹ノ尻、芦ノ浦、右阿波国より出張の網納屋十五軒、舟中小休⁽¹²⁾。

これは現点在集落の芦ノ浦に、阿波国よりの漁民が網納屋を十五軒設けて滞在していたことを示し、芦ノ浦が近世の漁業基地のひとつとなっていたことがわかる貴重な史料である。

芦ノ浦の山中に鎮座する高松権現に奉納されたものを見ると、近世後期の文久年間に寄進された灯籠、および、嘉永六年（一八五三）正月に「大坂屋網」の名で寄進された灯籠が残っている⁽¹⁾。大坂屋についての詳細は不明であるが、慶応二年（一八六六）に隣島である久賀島禪海寺境内に「為流人菩提塔」と刻んだ流人供養塔を建立した願主が大坂屋半次良（郎）であつ

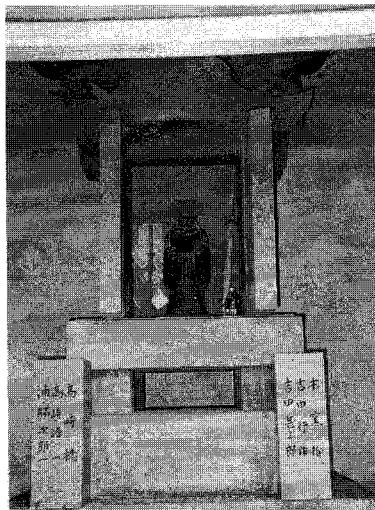


写真3 芦ノ浦高松権現
平成10年10月 筆者撮影

たという⁽¹⁾。五島列島の北端、北松浦郡に属する宇久島の神浦には「大坂屋」を屋号とする家が二軒現存する⁽²⁾。これらのことから考察するに、五島近海で操業していた外部漁家であったのだろう。

さらに、竹ノ浦にも周防大島郡出身の漁民の墓が残る。昭和二十年代には点在集落でも、竹ノ浦にはイワシ網の舟が停泊しており、多くの出稼ぎ漁民や就業者を抱えていたと思えるし、大敷網を行う業者もあり、やはり小屋を設置し、生活をしていたという。

このことからすると、梶島沿岸は外部の漁民が住み込む需要があるほどの漁場であり、少なくとも点在集落の海岸線は、多くの漁民たちが往来し、時には定住する場所のひとつであったと考えられる。

『桑原家系譜録』によれば、桑原家の鎮守として権現社が挙げられ「神体琴平千葉松次郎子孫ノ鎮守神トシテ芦ノ浦ニ勧請」とある⁽³⁾。これは高松権現のことであると考えられ、瀬戸内との関連がうかがえる。点在集落でも、芦ノ浦に限つて言えば、地下集落の管理が及んでいたともいえよう。本窯に立地するヤッショの土地を点在集落の人々が耕作していたこと、梶島の

最初の上陸地点と伝承されていることなどからも、ある時期、芦ノ浦は樺島にとって重要な土地であった可能性もあるのである。

(三) 中国、朝鮮との関係

また、樺島と中国、朝鮮との接触をうかがわせる事例もある。桑原家の先祖が樺島に住み着いた同年の承元四年（一二一〇）に男女十一名の朝鮮人が芦ノ浦に来島し、家臣となつて婚姻関係を結び、首ノ浦、本窯に住み着いたと伝えられている^[15]。現在、彼らの子孫を自認する家はなく、その詳細は不明である。

『五等編年史』は、近世の五島列島に多くの中国、朝鮮の船が寄港、漂着していたことを伝えている。樺島にもその例があり、「御領内江唐船朝鮮船琉球船漂着并沖合見掛調帳」には宝永四年（一七〇七）六月三日に

ハ生存ノ唐人ト共に、警固ヲ以テ長崎ニ送ル。
とする記事があるという^[16]。芦ノ浦の高松権現の境内には「唐人塚」と刻まれた石仏が安置されている。昭和以降も、朝鮮人が商売のために頻繁に往来しているとも伝えられている。もちろん他国との交流は点在集落に限らず地下においても行われていた。特に樺島点在集落への、外國人の移住を示す記事とは言えない。しかし、樺島の点在集落をも含めた他国との交流を示す一例とは考えられるだろう。



写真4 高松権現境内唐人塚石仏
平成10年10月 筆者撮影

(四) 大村からの移住民

点在集落の海岸部は、漁場、漁業基地として利用されてきた。しかし現在の点在集落には、そうした遺構、伝承はあつても、瀬戸内から移住してきたことを自称する家を見つけ出すことはできない。朝鮮人と姻戚関係を結んだ家があるとする伝承はあつても、外国よりの居住を伝える家のみあたらない。

現在の点在集落に住む人々の大半が、おそらく近世後期に五島の各地から移住してきた、半農半漁の人々であり、現世帶主から四、五代前に樺島に本家が移住してきた、と伝えている。具体例をいくつかあげてみよう。

浦本家 芦ノ浦や首ノ浦に住む浦本家は、もとは山間部に住んでいたが海岸部に降りてきている。芦ノ浦の浦本家は四代続く。そして大村辺りから流れてきたらしい、という。もとはどこから来たかはよくわからぬいが、当主の妻は福江島の奥浦と親戚関係がある⁽¹⁵⁾。

大小瀬家 桃島には一軒のみがのこる大小瀬家は、久

蔵—福太郎—林太郎—当主と続いている。
伊福貴の地命に大小瀬（オオコゼではない）があり⁽¹⁶⁾、姓は明治になつてから地名を参考にしたと考えられるが、樺島に移つてくる以前から大小瀬を名乗つていたという伝承もある。稻作、畑作とともに漁業も営んでいた⁽²⁰⁾。

鍛冶梁家 伊福貴郷に同名の地が残る鍛冶梁家もどこから移住してきたかを伝えてはいないが、鍛冶梁久蔵—久米蔵—休次郎—当主と、現在四代目である（初代の子供は十人くらいいたらしい）。鍛冶梁という地名はこの土地を開く時、岩ばかりで鍬がつぶれるので、自分達で鍛冶屋をしながら開いたため、と聞いている。

「梁」の字が何故ついたのか由来は分からぬ。

現在の当主は昭和四十四年、一度福江に移住した後に一念発起して昭和五十七年四月二日桃島に戻り、芦ノ浦近くの高ノ巣神社境内に住むことになつたのだという。昔は練り堀のつくりの小屋であつたものを、住みついてからブロック堀の大きな神社に変えている⁽²¹⁾。

白石家 首ノ浦の大師様の守り人として、重要な家であつた。この家はもと元来久賀島より移ってきたといふ。現在は絶家しており、墓石こそ隠崎の墓地に残るが、白石姓の家は現存しない⁽²²⁾。

高崎家 芦ノ浦に多い高崎家は、四代前に岐宿町の姫島（福江島の属島）より渡つてきた家であるという。樺島での本家とされる高崎吉右衛門は、姫島にヨシエンバタと呼ばれる大きな畑を持つていたということを伝えている。どういった理由で樺島に移住してきたのかはわからない。現在では海端に降りてきているが、以前はナンバエ、ジルクミといった山間部に多く住み、主に農業、林業を営んでいたと思われる。現在姫島は集団移住などの結果無人島となつており、岐宿町に現在でもゆかりの家があるかどうか定かではない⁽²³⁾。

野中家 野中家は竹ノ浦に居を構え、三代前の清蔵が岐宿より転入してきたという。（六市—清蔵—末松—忠太郎—当主）現在、一軒のみである。その後、奈留島に姻戚関係を結び、現在に至っている。現当主の妻

も奈留島出身者である。漁業を専業としている⁽²⁴⁾。

これまでの筆者の調査結果によれば、近世以前から樺島に住んでいたことを主張する家の例はなく、すべての伝承が似たような移住を語っている。それは福江藩による開拓移民政策の結果に大きくかかわるためであると思われる。寛政九年（一七九七）十一月、福江藩主五島守運は大村藩の大村純尹に開拓移民を送つてもらう旨申込み了承され、第一回輸送として一〇八名が五島に送られた。いわゆる「千人貴い」と呼ばれる集団開拓移民のはじめであり、伝承によれば以後約三千名以上の人々が五島列島各地に移住したと伝えている⁽²⁵⁾。

五島列島への移住の歴史を概観してみると、当初は福江島の平蔵、黒蔵、楠原等に居付いたという。彼らはそこから更に各地に拡散していくと考えられ、宇久島などの例外を除き五島列島全域に再移住、再々移住を繰り返していく。明確な年代は確定できないが、樺島にもそうした過程で入植したものと考えられ、大村藩から直接樺島に移住してきたとは考えにくい⁽²⁶⁾。

現在の点在集落の伝承からは、岐宿、奥浦などの福江島以外でも、姫島、奈留島、久賀島などに住んでいたものが移住してきた、とするものが見られることからもそれは推察できるだろう。

樺島の点在集落の全てが、同時期に一挙に移住してきたかどうかは定かではない。近代以降の移住も当然あるだろう。そして山間部、沿岸部に四、五軒ずつ住み着き小集落を形成していくと考えられる。はじめに住み着いたと考えられる場所は、島内の地名と同名の苗字を持つ人々がいることから推察するに、大小瀬、毛吹、首ノ浦、長刀、隠崎、鍛冶梁、竹ノ浦などであつたと考えられる⁽²⁵⁾。

近代以降、田崎、磯瀬、池ノ鼻などにも点在集落があつたとされるが、その姓は鍛冶梁、首浦など、既存の苗字を名乗るものが多かつた。大小瀬集落に隠崎氏や竹浦氏が住んでいたことなどからも、何世代かを経て、島内において再移住を幾度か繰り返してきた様子がうかがえる⁽²⁶⁾。池ノ鼻は桑原家の先祖とされる桑原甚吾左衛門の墓石があると伝えられ（筆者未見）、それと同時に水源となる池があるために人の住める環境

であり、樺島にとつても重要な土地であつたと考えられる。

しかし、樺島北部のこれらの地名を苗字とする者はいなかつたようで、また本家がそこに起因するとする伝承も、点在集落ではみとめられない。逆になにか仕事や催しがあると、田崎や磯瀬から伊福貴方面に訪ねて来ることがあつたと記憶している人が多くいる。このことから考えても、田崎組の諸集落は点在集落の中でもさらにその成立は新しかつたのではないだろうか。移住の根拠地でなかつたためか、地の利が不便であつたからか、樺島北部の点在集落は消滅の過程がもつとも早く、昭和五十年代にはすでに全戸がその地を離れ、あるものは離島し、あるものは生活に便利な地下集落に移住したという。

樺島の点在集落についての詳細は、昭和二十年代まで明らかにされることはなかつた。点在の人々がどのようなきつかけで移住してきたのか、それは正確にはいつ頃のことであつたのか、集団移住であつたのか、といったことを把握することは難しい。しかし、伝承から考察するに、少なくとも近世末期頃には各所に小

集落を構成し、半農半漁で、稻作、カンコロ栽培、古漁師業などを営んでいたことは確かなようである。

四、点在集落の近代

(二)、五島列島におけるキリスト教の発見

安政元年（一八五四）の日米和親条約、安政五年（一八五八）の日米修好通商条約の締結以降、幕府は踏み絵を廃止し、宣教師の日本逗留、教会設立を認めた。慶応元年（一八六五）には長崎にも大浦天主堂が建立され、チジヤン神父によつて、長崎の浦上の潜伏キリシタンが発見された。彼らは禁教時代もキリスト教の信仰を続け、教会が建立されたのを聞き大浦天主堂にはせ参じたのである。キリスト教の復活とされる一大事件であった。

五島列島各地にちらばつた大村藩からの移住者たちの一部も、自らが潜伏キリシタンであつた事を告白はじめた。若松村桐ノ浦のガスバル与作をはじめに、奥浦（福江島）、冷水（中通島）、上平（久賀島）、細石流（久賀島）、嵯峨島、鯛ノ浦（中通島）などに

住む潜伏キリスト教の代表が、大浦天主堂に赴いた。そして十字架を授かり、洗礼を受ける方法、教理を学ぶなどの動きをみせた。奥浦、水浦、久賀島など、多くの島々で「自分たち本来の宗教」であるカトリックに戻つたのである（復活キリスト教）。それまでは、仏教徒を名乗つていたが、踏み絵や代官の監視を逃れ、隠れて信仰を守つてきた人々が多くいたことが、この時点でき明らかになつたのである。

その後、明治元年（一八六八）に明治新政府が再度キリスト教禁制を布告したことにより、彼らは「五島崩れ」と言われる迫害を受けることになつた。地域によつて差はあるが、牢に入れられ、拷問が行なわれたりもした。こうした迫害は明治六年（一八七三）に改めて禁制が解除されるまで続いた。しかしそれ以降も、他宗教の人々から、「外道」と呼ばれ、馬鹿にされるなどの迫害を受けることになる。それも一段落した現在、公に彼らの信仰は認められ、五島列島の各地に次々とカトリックの天主堂が建立され、現在でもその多くが残つている。

しかし、すべてがそれに倣つたわけではない。仏教

や神道、その他の民俗宗教と習合し、潜伏キリストンの組織は、カトリックのそれとは大きく異なる信仰生活を営むに至っていた。それゆえ、彼らの一部は、自らがカトリックになることを是とせず、潜伏時代の信仰を続けていくことになつた。彼らにとって、カトリックにはない祖先崇拜や多神教、神社祭祀等も重要な信仰生活であったのであろう。ともかくも復活キリストンにならざり、しかし潜在的にはカトリックに少なからず影響を受け、信仰を維持する集落が出現することになつたのである。

近年、宗教学者の宮崎賢太郎は長崎県内に広く分布するこうした人々を「カクレキリシタン」と規定し、分析を加えつつある⁽²⁵⁾。自發的な選択であるかどうかは定かではないが、樺島の点在集落の人々もそうしたカクレキリシタンとして組織を維持する道を選んだ。事実、樺島には現在に至るまで天主堂は存在しないし、平成三年（一九九一）に福江港と本窓・伊福貴両港を結ぶ高速艇「ニューかばしま」が就航するまで、福江島まで片道一時間かかる島であった（現在は二十分）。そのような条件下において、他島の天主堂に

通うことも難しい。転出した人々の中に、カトリックとなつた人はいるようだが、少なくとも点在集落の人々の多くはカクレキリシタンを貫いていたようである。

明治以降のキリストンの現状把握については、久賀島や日島等では早くから彼らがキリストンの末裔であることが明らかになつていて、逐一その社会の構成員を調査した記録が残つている。しかし樺島にしてこうした調査が行われた形跡はなく、彼らがカクレキリシタンであることは公になつていなかつたのである。

明治四十年（一九〇七）刊行の『長崎縣紀要』には彼らのことについて次のようない記述がある。

五島列島中、「いつき」と称する部落各處に散在せり。彼等は海濱に生活せずして多く山の手に住す。是寛永の耶蘇教禁令の出でてより、同教信者の此島に流されたものの子孫なりと云ふ⁽²⁶⁾。

識者の間では、明治期にはすでに居付きと呼ばれる五島各地に点在する人々が、キリスト教徒の末裔であ

ることは周知のことであつたようである。しかし、少なくとも樺島内の地下集落の人々が、点在集落の人々をキリストンと認識していたとは思われない。長崎や東京で自明の情報が、樺島においても同時期に伝わつてゐるとは思えず、むしろそうした風評は見られなかつたのではないだろうか⁽²⁾。

(三) ソコソコ宗徒としての点在集落

明治期～昭和初期の点在集落の人々は、仏教徒、あるいは神道の檀家（シントウサイ）として、屋内に仮壇を設け、表面的には地下の人々と似たような信仰生活を行つてきた。しかし、基本的に点在同士でしか婚姻関係を結ばないという通婚圏の差、先住民と新規移住民という関係、経済格差なども影響して、地下の人々にはよくわからない宗教、「ソコソコ宗」の信徒だと思われていたとされる⁽³⁾。

地下集落の人より、本窓で電報配達員をしていたこ

とのある人から以下のような体験を聞く機会を得た。

点在集落の人々が亡くなつた時、弔電などを届けに

行くとき、彼らは子供を見張りに立て屋内で集まつて何やら行つてることがあつた。通例その儀式らしきものが終まるまで外で待たされ、それから用件を済ませたり、饗應に預かつたことがあるという。

ある時になんとはなしに耳を欹てると、「ソコソコ」と唱える声が聞こえたのだという。それゆえこの人は「ソコソコ」と唱えるからソコソコ宗なのだと思つた⁽⁴⁾。

この事例は地下集落の人による一種の点在集落解釈かと思われるが、ソコソコ宗についての一般的な解釈とは異なつてゐる。竹田旦によれば「ソコソコ」には隠れるという意味があるらしく、よく分からぬ宗教という意味合いであつたと考えられる。その表現からもわかるように、ソコソコ宗とは他者表象であり、点在集落の人々は自身の宗教を「カクレ宗」と呼んでいたという⁽⁵⁾。

隠れて何かを行つていたという経験を持つ人々は現在でもおり、子供の頃、他宗の人が来ないか見張りに立たされた経験を懐かしく語つた。逆に地下集落の人

から、点在集落の人たちが、カンコロ（サツマイモ）を貯蔵する床下の穴に皆で入つて何やらやつていたと

いう目撃談を聞くことができた⁽³⁾。

点在集落にはキリストンを思わせるものよりもむしろ、修驗や遍路、民俗信仰を想像させるようなものが多々あつた。前述の芦ノ浦の高松権現や高ノ巣神社、首ノ浦の三体地蔵や真言宗系の寺院（誓願寺、白石大師教会。いざれも現在廃寺）などがそれである。現在行なわれていらないが、伊福貴では厄年の者が高松権現に樽を奉納する樽入れ行事が行われていた⁽⁴⁾。また一月と八月に祭りが行われ、イボを取ることに靈験のある芦ノ浦のイモ地蔵は、現在でも評判を集め地下集落の女性たちにも信仰されている。

占い、託宣を伝える有名な法人と呼ばれる人々も住んでおり、島外からは巡礼の行者や遍路などがしばしば訪れていた。高ノ巣神社に住む法人に、島外、地下の人々が相談に行き、参拝・託宣をいただくことは現在でも行なわれている。

以上から考察しても、点在集落はキリストンの要素とはかけはなれた信仰を保持する側面もあつたといえ
る。また、現住でこそいないが、芦ノ浦や竹ノ浦などに在して住んでいたとも考えられる。実際、久賀島の細石流⁽⁵⁾や野首（現在無住）、嵯峨島⁽⁶⁾などは、仏教徒と潜伏キリストンの末裔が混在して住んでいた。
以上のことから、明治以降、昭和二十年代以前までは、地下集落とは何らかの差を認められつつも、半農でカンコロ（サツマイモ）栽培、稻作等を行い、漁も行う集団で、もっぱら内部同士で姻戚関係を結ぶソコソコ宗の人々という認識であつたと思われる。
もちろん、樺島以外の島々ではカトリックに改宗した人々は、教会に所属し、他宗の人々とは一線を画していた。そして、五島列島各所に潜伏キリストンの末裔がいることは周知の事実であったので、あるいは樺島点在集落もそれではないか、という解釈、風評があつた可能性は否定できない。しかし、昭和六年（一九三一）、田北耕也によつてカクレキリストンの調査が行われ、昭和二十九年（一九五四）、「昭和時代の潜伏キ

リシタン』が出版され、福江島や奈留島の分析が公になる頃までは、キリシタンというのはおおむね禁教時代の潜伏キリシタンないし、復活キリシタン信者を指していたと思われ、カクレキリシタン（旧切支丹）については、それを潜伏キリシタンの末裔と認識することは希であったのではないだろうか。

(三) カクレキリシタン研究と樺島点在集落
公的に彼らが潜伏キリシタンの末裔である、と位置づけられたのは、昭和二十四年（一九四九）以降のことであると思われる。当時東京大学の研究生であつた山階（浅野）芳正が、地理学の調査で約百日間五島列島に滞在し、調査を行つた際、樺島にも訪れている。その時、点在集落の人々がカクレキリシタンであることを知り、そのことは次のように記された。

古くから土着する人々及びその集落はデゲと呼ばれ、すべて仏教徒であつて、人口上からも政治及社会経済の上からも五島の根幹をなすものである。これに對し近世を通じ開拓のために他藩より移住せしめら

れた人々及びその集落はヒラキ（開拓者の意）或いはイツキ（移住者）と呼ばれ、山の中や辺鄙な海岸に散在的に分布して居住し、生活水準も低位にあつてデゲからは輕蔑視され、相互間に社会的緊張感が存在する。これらのヒラキの大部分が切支丹なのである。・・・（中略）・・・ところで意外なことはこれら切支丹の他に、近世禁教時代さながらに、表は仏教徒か神徒を装いながら、蔭で極秘のうちにキリスト教を信奉する旧切支丹が存在することである⁽²⁾。

当時、樺島点在集落は、山階の指摘するとおり「ヒラキ」と呼ばれるのが一般的であつた。現在でも地下に住む高齢者はヒラキの語を使用することがある。そして「ヒラキンガッパ（ヒラキの河童）」などと称され、地下集落に蔑視されていたという。山階は多くの旧切支丹（カクレキリシタン）が五島列島に現住していることを指摘し、さらに樺島におけるその秘匿性を次の様に述べている。

帳は勿論秘密組織であつて、その秘密保持の程度が

ンであることを知つた⁽⁴⁾。

頗る嚴重であることは、近隣チゲ部落の人々すら旧切支丹の存在を全く知らぬ場合が多い事からも容易に知れよう。筆者は樺島の看防の義兄にあたるチゲ

の人に、義弟がかかる宗教の信奉者であることを筆者からきくまで夢にも知らなかつたといわれた経験がある⁽⁴⁾。

この報告から考察してみると、樺島のカクレキリシタンの信仰が島民たちに知られるようになったのは山階の調査時点とさほど変わらないということになる。ちなみに、筆者による聞き取りでも、

戦後間もなく、宮様（筆者注皇族の家系である山階のことであろう）が樺島に調査にいらつしやつた。そして点在集落の調査をした時、「この島にはキリスト教徒が沢山いる」とおっしゃつた。それまで地下（伊福賀、本窯集落のこと）の人々は、点在の人々が神道ないし真言宗の信徒と考えていた。この宮様の指摘によつてはじめて点在集落がカクレキリシタ

ンであることを知つた⁽⁴⁾。

とする伝承を複数の方から聞くことができた。

このことから考えると、当時の五島列島のキリストとは、いまだ名乗りをあげてカトリックに改宗した人々のことを一般に指し、現在概念規定されているカクレキリシタンとは必ずしも結びつかなかつた可能性が強いのである。

キリスト教史については、宗教学の立場から姉崎正治⁽⁴⁾、浦川和三郎⁽⁴⁾らにより、カトリックに改宗した復活キリスト教の歴史や宗教観を中心とした研究が行われた。カクレキリシタンについてはそれより大分後、山階が調査した時期と前後して田北耕也、古野清人らによる調査が、五島列島各地で行われたこと等から考えてもそれは裏付けられよう。

昭和二十五年に離島調査の一環として樺島を訪れた竹田旦によつても、点在集落についての情報が一部明らかとなる。それは彼らがカクレキリシタンであること、末子相続を行つてゐること、法人が点在集落に住んでいることなどであつた⁽⁴⁾。その後昭和三十四年

(一九五九)、古野清人によつて点在集落のカクレキリシタンの特性が明らかにされるのである。

少し長くなるが、古野清人が『隠れキリシタン』において言及した樺島点在集落の、昭和二十年代後半の状況と思われる箇所を引用する。

樺島は人口およそ三、一五〇「開き」を除いて真宗の信徒約七〇%、浄土宗と禅宗が約三〇%である。旧藩時代には富江領で、大蓮寺の門徒衆の共有財産として原野があり、寺院でなく「お座」（宗教的事務を司る場所）を設けて各檀家を統御していた。この他に入植させるには真宗信者であることを条件にして原野を分け貸した。これがキリシタンの開き部落の発端である。それで初めは真宗の行事を強制されていた。明治九年の地租改正により、宗教団体が原野の共有権を村に委ねた。「開き」はある事情のため明治三、四十年頃に真宗から禅宗に転じた。彼らは神道祭としては福江の八幡様または本金の姫大明神の氏子であり、また病気に罹らないため大師信仰にも入っている。家には神棚あり仏壇あり、荒神

様も祀つている。この島のキリシタン家族は多くは外海から初め福江島に入植したものが、さらに転住してきたようである。一九五一年の調査では伊福貴郷（前海・後海）に一二二戸、本釜郷（竹ノ浦・芦ノ浦・田崎）に一二二戸、合計二三四戸と推定されている。伊福貴郷と本釜郷との本村を除いて、全島に散在している開き部落はほとんど全部キリシタンとみなしてよい。伊福貴・焼山・長刀・芦ノ浦・田崎に各々「帳」があり、これらの五帳は帳役・水方（看防）・下役（または取次役）の役職者が揃つている。水方のところに日繰りと死んだとき土産に持たせる「きれ」がある。昔は外道とかエタとか呼ばれて蔑視されたというが、今では差別的な待遇や感情は激減している。この島では先住者を地下というよりも「村」という。「村」は長男相続、「開き」は末男相続とよくいわれているが、これは五島全体にわたつてなお詳しい調査を要する。

五つの組の「帳内」は起伏のはげしいこの島のあちこちに所によつては入り乱れて点在しているのが特徴であるが、この傾向は伊福貴の組では最も著し

い。毛福貴・野崎・長刀・大小瀬・浦ノ浜・オイゴ。
隠崎・番岳の集落にわたり四一戸で構成されてい
る⁽¹⁷⁾。

古野はそのほかに、洗礼の行い方、年中行事の一部、
芦ノ浦の高松権現信仰が当時カクレキリシタン式であつ
たこと、伊福貴の点在集落の大師信仰、若者がオラッ
シヨを覚えようとしない現状などを報告している。

古野の『隠れキリシタン』によつてその内容が一部
明らかとはなつたが、樺島内に何冊同書が流通してい
たかは定かではない。しかし、同書は、樺島カクレキ
リシタン研究の基礎文献と考えていいだろう。

(四) 地下集落とのかかわりとその変化

山階、竹田、古野が樺島を調査したと思われる昭和
二十年代は、樺島村全体がイワシ網漁の最盛期にあた
る。獲られたイワシは、地下集落にて煮干に加工され、
出荷するのが常であり、その加工のためには当然、多
くの薪を必要としていた。ゆえに山間部に住む点在集
落の人々にとって、山仕事は大きな収入源となつてい

た⁽¹⁸⁾。それとともに、従来続けてきた農作業によつて
食料生産がなされていた。また地下の人たちも家族総
出で働くことが多かつたため、点在の人々に子守の仕
事を任すといったことも見られた。もちろん点在集落
の男たちの中には、復員後にイワシ網の船に乗り込ん
だり、あるいは遠洋航海船に乗り込み、成功した者も
いたようである。このように、この時期樺島は稀代の
好景気であり、経済状態は地下集落には劣つていたに
せよ、点在集落でも充分に生活していくことが可能で
あつたと考えられる。

昭和二十五年（一九五〇）をピークにして、樺島の
景気、人口は徐々に減退をはじめる。大量にあつたイ
ワシの漁獲がなくなり、アグリ船が撤退していくこ
とが最大の原因である。さらにいわゆる「金の卵」と
して、中学校卒業後の青年が、長崎、福岡、関西方面
へ就職するなどにより続々と転出していったことも、
人口の減少に拍車をかけた。昭和二十六年には全体で
二三四戸とされていた点在集落は、平成十四年現在十
分の一以下に激減している。その過程で、当然点在集
落の組織も改編を余儀なくされた。芦ノ浦集落はかつ

て四十戸以上の家屋があり芦ノ浦のみで複数の組に分かれていたというが、現在は七戸である。以前は海岸線から山間部にかけて広域に家屋が並んでいたが、全ての人が山から降り、コンクリート舗装した市道に面した海岸部に密集して住んでいる。竹ノ浦も現在は三戸のみで、やはり山間部から海辺に住みなおしている。田崎は全戸が山を降り島外に転出、ないし地下集落に移住している。現在田崎は採石場として外部の業者に貸し出され、本窯郷にとつての大きな収入源となつている⁽¹⁾。

首ノ浦には昭和四十九年（一九七四）、本窯、伊福貴の兩小学校を統合した樺島小学校が創立されることにより、その景観は一変した。田畠であつた場所に現在は小中学校が建ち、建設会社の施設、浮き棧橋などが整備され、首ノ浦集落はその近隣に一所に並んで構成されている。

網元であった新屋と呼ばれる家の当主が、神輿、宝来丸と称する船を陸上で引く曳船行事を導入した事に端を発し、現行の形になつたと伝わる。行政組織として本窯郷に属する芦ノ浦、竹ノ浦、田崎の人々もこれに参加し、神札を貰つたり、所有する漁船のお払いをしてもらうことは通常の年中行事であつたし、現在でもそれは変わつていない。

祭礼時、組立式の宝来丸の組立は、竹ノ浦の人々が担当する作業であり、素人には難しい作業であつたという。芦ノ浦の人々は神輿のお仮屋入口に、毎年麦藁を軸にして、杉の枝を全体に差し込んだ鳥居（写真5参照）を作ることが分担であり、山から多くの杉の枝を伐採してくることが年中行事であつた⁽²⁾。田崎は早くに解体し、芦ノ浦も竹ノ浦も人口の減少でその作業は負担となつた。田崎採石場の賃貸料によつて、宝来丸は近年新造され、それまでの古い宝来丸（写真6参考）は福江島の五島觀光歴史資料館に保管、展示されている。現在の宝来丸は解体せずに保管し、お仮屋の前に祭礼ごとに立てる鳥居も木製の組立式となり、芦ノ浦だけではなく郷の人々総出で組み立てている。現

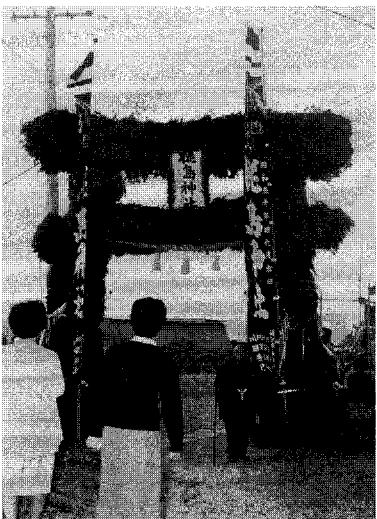


写真5 桑原義文氏提供
昭和50年頃の樺島神社祭礼鳥居

在芦ノ浦は婦人会の人々が祭礼中の食事の用意などで本窯と協力しあつていてる。

また、かつては神輿を担ぎ本窯内を走り回り、宝来丸を力強く指揮する六尺と呼ばれる役職は、元来本窯の地下の人々のみに許されたものであつたらしいが、島の若者が少なくなるにつれ、点在集落の人々が六尺になることも普通のことになつた⁽⁴⁾。

(五) カクレキリシタン組織の解散

人口の減少、社会組織の変化は、信仰組織にも変化をもたらした。末子相続、隠居分家慣行によって、耕



写真6 本村七生氏提供
昭和50年代の宝来丸

地、住宅を順調に増やしていた当時は、各地域に元帳（クリワ）があり、神父の役目を担うとされる帳方、名付けと呼ばれる洗礼を行う水方、更に下役といわれる人々が、組織の冠婚葬祭、年中行事の一部を司つていた。古野の調査時より、後継者の不足に関する問題は指摘されていた。しかし昭和四十六年（一九七二）には芦ノ浦、竹ノ浦を除く、主に伊福貴の点在集落の元帳が合併し、合同で行事を行つていた⁽⁵⁾。しかし役を持つ人々の高齢化、若者の不在による跡継ぎ問題等により、昭和五十六年（一九八一）九月十四日、ついに組織を解散す

る事とし、それまで使用していたカクレキリシタンの帳、その他道具類を、福江島の堂崎天主堂に預けたのだった。それに同調しなかつた竹ノ浦もほぼ同時期に組織は解散していたとみられる。最後に残った芦ノ浦も、昭和六十二年（一九八七）六月二十六日、同様に堂崎天主堂に帳を預け、結果として信仰組織としての桃島のカクレキリシタンは解散したのである^[5]。

その間、失わ

れつつある桃島のカクレキリシタン習俗を把握する試みとして、川上弥久美によ



写真7 芦ノ浦における「おたいや」
昭和61年12月23日、川上弥久美氏撮影

クリスマスに相当する「おたいや」（写真7参考照）の調査、金川義人や堀江克彦・松浦康之に

人口が減少したのであるから、末子相続慣行等行われるはずもない。山仕事を行うことも少なくなり、山の神まつりも点在集落ではかろうじて竹ノ浦集落で本窯郷主催の形で行われているにすぎない。

島外の子供が結婚する際にカトリックになつたのに従い自分もカトリックになつた一軒を除いて、彼らは

よる見聞、クリスタルウェランによる調査等が行われた^[6]。

解散することによって行われなくなつたのは、元帳ごとに伝承され、帳方の持つ日繰りと呼ばれる暦を使用し、ヨカ日、ワルカ日を算出し、下肥をまく仕事や針仕事をしてはいけない日を点在の人々が聞きに行くこと、「おたいや」などの集会、抱き親を決め、洗礼名をつける名付けと呼ばれる人生儀礼（もはや島内では子供が生まれる機会自体希薄であるので当然であるが）、表向きの神式、仏式の葬儀とは別に極秘に行うカクレキリシタンの葬儀、これらにともなう祈りの言葉・オラッショの伝承等である。すなわち、人生儀礼と一部の年中行事の共有、役職の島内での伝承が途絶えたわけである。

これまでと変らず神道、仏教徒として先祖祭祀を行つてゐる。帳方をつとめた人々でさえも、亡くなれば島外に住む子供たちの意向に従つた仏式、神式の葬儀が行なわれる場合が大半である。

もとより点在集落のカクレキリシタンについて多く語る人は限られている。組織が解散して二十年近くたつ現在でも点在の生活の詳細に口を閉ざす方もまだ多い。信仰組織は解散しても、年中行事や祭事等を旧来のまま続ける人々も若干残つてゐる。しかし、逆に解散した事により隠す必要がなくなり、解散以前の制約の多さを否定的に回顧する方もある。

組織が解散しているので、点在集落の人々はもはや

厳密な意味でのカクレキリシタンではない。しかし今

後の伝承の可能性は極めて低いが、一部の人々にとつてカクレキリシタンの信仰、行事は現在でも生活の一

部となつてゐる。彼らはカクレキリシタンである以前に移住者の子孫、そして五島列島・桟島の住民として様々な生活に關つてきた。たしかに一部秘密結社的で閉鎖的な部分もある。しかしその秘密の内容を点在集落の人々全員で共有してきたわけではないだろう。彼

らにしてみれば仏教、神道や民俗宗教等々いくつもの信仰要素のひとつとして、キリスト教に起源をもつと思われる、いわば秘密のキリスト教民俗があつたにすぎないのである。

こうした変化を経てきた点在集落は、現在でも桟島の重要な位置を占めており、通常の生活を送つてゐる。他地域に転出した人々についての詳細は不明である。

郷土会などが組織されているわけでもなく、桟島以外に集落や集團を結成したという話も聞かない。点在集落自身、何らかの転機がなければこのまま減少の一途をたどり、消滅の危険性をはらんでいるのが現状である。

五、おわりに

本稿では、点在集落におけるカクレキリシタンの特性の把握よりもむしろ、五島列島・桟島の生活空間の一部として、点在集落がいかなる変遷を経てきたかについてとらえる事につとめた。点在集落内にはいつ、いかなる理由で造られ、どのような信仰、利益がある

のか不明な石造物や祠、神が多数存在する。そうしたこととは点在集落に限らず地下集落、引いては日本全国でも同様であろう。通常と異なる点は、点在集落がカクレキリシタン集落であつたがために、そこにある多くのものがキリスト教、或いはカクレキリシタンと関係あるのではないか、と期待する視点が多く生まれる点であろう。詳細不明の祠や習俗について質問すると「それはキリシタンのだろう」「点在のだろう」とする評価は聞取り時によくあつたし、カクレキリシタンにキリスト、マリア信仰や十字架の聖性などを期待する視点がこれまでのカクレキリシタン研究の主要な位置を占めていたといえよう。

もちろん、カクレキリシタンに起因すると思われる民俗の分析は重要である。現在は廃れた帳、行事は言うまでもなく、キリスト教の影響なしでは存在し得なかつた伝承は当然多い。長崎で碑になった五島出身の聖人、ヨハネ五島（ジュワン五島）の出身地が梶島である、という伝説が、昭和四十年頃には語られていました⁽⁴⁾。明治期に祭礼を行なうようになった伊福貴の祇園様にある祠のひとつが、「シバタサンミギリヤサマ」

というカクレキリシタンの神である、という伝承もある⁽⁵⁾。芦ノ浦や高ノ巣神社における「サンジュワン」の転訛と思われる「三次わん様」という石の信仰などはカクレキリシタンの宗教観の分析が不可欠であろう。消滅の可能性が高い点在集落についての多角的な分析は、今後急務の課題である。

しかし、信仰の側面のみでなく、梶島の点在集落史を紐解いていけば、その変容のしかたは、実は地下集落やその他地域の移住者集落のそれと大差あるわけではない。カクレキリシタンであろうとなかろうと、様々な要因と多様な人々の生活によって構成される五島列島の一地域の変化過程であるといえよう。

ただし、これが梶島のみに通用する特殊な例である可能性も否定できない。五島各地には、仏教徒とカトリックとカクレキリシタン（奈留島等）、仏教徒とカトリック（嵯峨島等）など様々な宗教が混在する地区と、かつてのカクレキリシタンのみ（前島等）、カトリックのみ（蕨小島、かつての姫島等）、仏教徒（福江島の各所等）のみの地区等々、集落の構成によつてその変化状況は様々であろう。しかし、どの場合にお

いても、キリスト教等の特定宗教の影響のみに視点を払うのではなく、多様な面を分析する視点から、これまでの研究とは異なつた五島像が描けるのではないだろうか。

〈付記〉

本稿は日本私立学校振興・共催事業団の平成十年度学術研究振興資金および成城学園からの研究費助成により成城大学民俗学研究所が実施した研究プロジェクト「沿海諸地域の文化変化の研究」——柳田國男主導「海村調査」「離島調査」の追跡調査研究——（研究代表者・田中宣一成城大学教授）の成果の一部である。

調査の過程で、共同調査者の成城大学教授・村田裕志先生、大東文化大学教授・高桑守史先生には幾度となくご助言をいただいた。堂崎天主堂では快く資料を拝見させていただいた。樺島内においても多くの方々にご協力いただいた。主要な方々の氏名を記し感謝の意を表したい。大小瀬トミ氏、鍛冶梁ミヨ氏、川上弥久美氏、桑原和代氏、桑原義文氏、城崎亀雄氏、高崎ハマ氏、野中渡氏、本村七生氏、吉田甚三郎氏、吉田行

作氏。すでに鬼籍に入られた方もいる。浦本金松氏、首浦スマ氏、筆者を実の息子のように迎え、接していくださつた大小瀬末福氏のご冥福を祈り、本稿を捧げたい。

〈註〉

- (1) 五島列島を扱った代表的なものをあげれば、アンジェラ・ヴォルペ『隠れキリシタン』(一九九四年 南窓社) 浦川和三郎『五島キリシタン史』(一九五一年仙台市教館出版部 一九七三年 国書刊行会より復刻)、片岡弥吉『かくれキリシタン——歴史と民俗』(N.H.K.ブックス五六 一九六七年 日本放送出版協会)、田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』(一九五四年日本学術振興会 一九七八年 国書刊行会より復刻)、長崎県教育委員会『長崎県のカクレキリシタン——長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』、長崎県文化財調査報告書第一五三集(一九九九年)、菱谷武平『カトリック部落の伝統と現状(一) 特に潜伏、露見の居付信徒の調査を中心にして』(『昭和三十三年度 五島列島総合学術調査報告書(一)』一九五九年 長崎大学総合学術調査団)、古野清人『隠れキ

リシタン』（一九五九年　至文堂）、丸山孝一『カトリック土着　キリシタンの末裔たち』（NHKブックス三七三　一九八〇年　日本放送出版協会）などがあり、キリスト教の影響、信仰の現状、変化などを論及している。

(2) こうした資料としては、福江島富江町山之田での歴史を描いた木場田直『西海の灯——五島切支丹秘話』（一九七五年　私家版）、中通島での生活史を描いた中田武次郎『キリシタンのルーツ——最後の殉教者とその一族』（一九九四年　近代文藝社）、福江島水の浦での生活を描いた山口ヨシノ『五島の思い出』（一九九〇年　聖母の騎士社）などが参考になる。ただし、いずれもカトリック信者の自叙伝的性質が強い。

(3) キリシタン史の延長とみえることもできるが、高崎恵は集落の組織の変容、アイデンティティの推移をさぐるところみをしている。高崎恵『自己像の選択——五島カクレキリシタンの集団改宗』（国際基督教大学比較文化叢書4　一九九九年　国際基督教大学比較文化研究会）参照。

(4) 村田裕志「五島列島・樺島のくらしと民俗——半世紀の変容」（『民俗学研究所紀要』第二十四集　二〇〇〇年　成城大学民俗学研究所）、同「長崎県福江市——

樺島（旧南松浦郡樺島村）」（田中宣一・小島孝夫編『海と島のくらし——沿海諸地域の文化変化』（二〇〇二年　雄山閣）所収）参照。

(5) 竹田旦『離島採集手帳 第四冊　[長崎縣樺島村]』（一九五〇年調査　成城大学民俗学研究所蔵）、そのデータを活字化した「長崎県南松浦郡樺島」（離島生活の研究　一九六六年　集英社　一九七五年　国書刊行会より復刻）によれば、採集当時の話者に点在集落の人の名はない。

(6) ゼロポイントの設定、変化の追跡および現状との比較の困難さについては、拙稿「五島列島の民俗研究と『離島採集手帳』」（田中宣一・小島孝夫編『海と島のくらし——沿海諸地域の文化変化』（二〇〇二年　雄山閣）所収）、小野博史「フィールドワークと『北小浦民俗誌』」（福田アジオ編『北小浦の民俗　柳田国男の世界を歩く』（二〇〇二年　吉川弘文館）所収）などを参照。

(7) なお、樺島の属島・ツブラ島にも、明治、大正期に福江島、久賀島、奈留島などから移民があり、点在集落を形成していくが、昭和十年代には機雷爆破事故、不漁などが重なり、無人島となっている。移民が新しく、また無人島である現在、ツブラ島についての把握は困

難であるゆえ本稿では対象外としている。ツブラ島の

盛衰については川上弥久美『五島桃島』その二 つぶ

ら島物語』(一九八〇年 私家版)を参照。

(8) 前掲村田裕志「五島列島・桃島のくらしと民俗」半

世紀の変容——四五頁には一九九八年現在の桃島人口構成が表になっており、点在集落の大半が高齢者によつて構成されていることが明らかになつていてある。

(9) 池ノ鼻説は『南松浦郡樺島村郷土誌』(一九一八年

伊福貴尋常小学校)、芦ノ浦説は野口仙章『五島桃島』(一九八〇年 私家版)ほかを参照。上陸地は諸本に

より異なる。

(10) たとえば、久賀島の細石流では、天保四年(一八三四)

には福江島戸岐の和泉屋八平次が鮪網代經營を出願し

ているし、同田ノ浦にも「慶應四年 大阪出身 喜左衛」(慶應四年は一八六八年)と刻まれた墓碑がある

という。内海紀雄『五島・久賀島年代記——藩政時代

と明治前半期を中心とした概観』(一九七四年 福江

市立久賀小学校創立百周年記念事業期成会 一九八五

年改訂 五島・久賀島年代記刊行会)七一頁、八七頁。

また若松島にも泉州佐野の漁民や紀州の鯨漁を行なう人々が来島していたという。若松町教育委員改編『若松町誌』(一九七九年 若松町役場)一二四〇一二九

頁。

(11) 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第五卷 九州第
二の二(一九九八年 大空社)三五九—三六〇頁。

(12) 前掲『南松浦郡樺島村郷土誌』には「名勝ノ地トシテ
ハ蘆之浦ニ高松大権現アリ何時頃ヨリ祭ラレンカ詳ナ
ラザレドモ寛政九年(紀元二四五七年)ニモ石燈籠ヲ
献ザシ人アリ現ニ靈現顯者ナリトテ遠近ノ獵師参拝ス
ルモノ多シ」とあるが、寛政九年(一七九七)奉納の

灯籠については筆者未見。なお五島列島の高松神社は、
桃島のほかには管見の限り一社見受けられる。日ノ島
郷鎮座の日ノ島神社は、明治四年(一八七二)改称以
前は「高松神社」と称し、讚岐高松に鎮座の大巳貴命
を日ノ島村金堂崎に勧請したものという。文政八年
(一八二五年)記されたという、「高松神社の記」は、若
松町を代表する古文書の一つであるという。前掲若松
町教育委員改編『若松町誌』二四二頁、三一八頁。

(13) 前掲内海紀雄『五島・久賀島年代記——藩政時代と明
治前半期を中心とした概観』八七頁。

(14) 平成十二年(二〇〇〇)三月、神浦の郷土史家、山田
康博氏の屋号調査記録を提供していただいた。

(15) 前掲野口仙章『五島桃島』第五章。当時島外に転出し、
長崎市に住む伊福貴の桑原家本家当主より、川上弥久

美氏が原本を複写したもの転載してある。

- (16) 平山徳一『五島史と民俗』(一九八九年 私家版) 四一八頁。福江市史編集委員会『福江市史』上巻(一九九五年 福江市) 一一六頁。
- (17) 中島功『五島編年史』(一九七三年 国書刊行会 一九三九年執筆の原本を著者没後の刊行) 五七一頁。
- (18) 話者は明治四十二年(一九〇九)生まれ。平成十年(一九九八)八月二十五日、筆者による聞き取り。
- (19) 前掲『伊能忠敬測量日記』には、測量箇所の記述として「ヲコ瀬」があり、近世後期にはすくなくとも地名としての大小瀬は存在したことがわかる。
- (20) 平成十年(一九九八)八月四日、大正十二年(一九二三)生まれ当主および大正十三年(一九二四)生まれ
- (21) 話者は昭和九年(一九三四)生まれ。平成十年十月十六日、筆者による聞き取り。高ノ巣神社の由来は、昭和十三年(一九三八)にはじまる。奈留島の橋口キクという女人人が神を信仰していて、高ノ巣山のこの神が世に出たいと知らせが来たのだという。そして信仰者が話しあつて「仏像をつくらなくてはいけない」ということになつた。現当主の叔父にあたる人が仏像をつくることになつた。その時像を造るのが初めてだつ
- (22) 話者は大正十四年(一九二五)生まれ。平成十一年(一九九九)八月二十日、筆者による聞き取り。
- (23) 話者は昭和十四年(一九三九)生まれ。平成十二年(一九九〇)三月十一日、筆者による聞き取り。
- (24) 話者は大正十四年(一九二五)生まれ。平成十一年(一九九九)三月十一日、筆者による聞き取り。
- (25) 移住についての資料は多く参考文献を挙げれば、前掲浦川和三郎『五島キリシタン史』、前掲片岡弥吉『かくれキリシタン——歴史と民俗』などが詳しい。
- (26) 横島は福江藩支藩である富江領にも分け隔てなく移住することができたのかどうかは定かではないが、ほかの富江領にも移民が展開していると思われるが、當時問題にならなかつたのであろう。
- (27) 地名とは関係ない、川中、浦本、浦脇、末留、野中、平山などの苗字も見受けられたので、すべての苗字が横島の地名をとつたとは思われない。これは横島に限つ

たことではなく、久賀島の居付の大村藩からの移住者

と思われる人々も、五輪、外輪、小島といった地名をもつとする人々と、野浜、坂谷などの地名とは関連ないと思われる苗字を持つ人々もいる。また、明治以前から柵島に住んでいた地下の人々には、地名に起源を持つと考えられる苗字を持つ家はなかつたようである。

(28) 第二次世界大戦後の一時期、田崎には島外より開拓民を募つたことがあつたが、一世代で離島してしまつたともいゝ、それとは異なる人々が住んでいた。

(29) 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』(一九九六年 東京大学出版会)三〇~三二頁。宮崎は、禁教時代の形態を「潜伏キリシタン」、近代以降、カトリックに戻つた人々を「復活キリシタン」、カトリックにならずに潜伏時代の形を保持する人々を「カクレキリシタン」と規定しており、本稿も便宜的にそれにならつてゐる。

(30) 長崎縣協賛会『長崎縣紀要』(一九〇七年)三五二頁。

(31) 立平進「五島列島と西海地域の生活技術史」(東シナ海と西海文化⁴ 一九九二年 小学館)三五〇頁には同様の見解が、近世に発明され、全国的に重宝されたとされる脱穀具の千歯抜きが、久賀島に伝來したのが明治二十七、八年であつたと伝えられて

いる点から述べられている。

(32) 誤記の可能性もあるが山階芳正によれば、どの地域かは不明であるが「コソコソ宗」とも呼ばれているといふ。山階芳正「五島の人文地理」(『五島列島 五島列島(九十九島) 平戸島學術調査書』 一九五二年 長崎県)一五一頁。

(33) 平成十一年(一九九九)十月、本郷集落にて筆者による聞き取り。

(34) 平成十年(一九九八)八月、芦ノ浦集落にて、筆者による聞き取り。

(35) 平成十二年(二〇〇〇)三月、伊福貴集落にて筆者による聞き取り。

(36) 前掲竹田旦『長崎県南松浦郡樺島』七六三頁。

(37) 細石流については、久賀島における復活キリシタン迫害の歴史の舞台として、昭和十年(一九三五)、柳田國男主導の「山村調査」に訪れた瀬川清子によつて報告されている。瀬川清子『五島雑記』(『旅と傳説』第一九三六年)。細石流の復活キリシタン達は主に山間部に住み、海岸部に住み漁業を営むものは仏教徒であった。筆者の調査によれば、細石流の復活キリシタンの人々は海外への移民、長崎や福岡への転出の結果、平成十四年現在、一軒も残つておらず、

現在の細石流には仏教徒のみが住んでいる。

(38) 平成十二年（二〇〇〇）十月、筆者による調査によれ

ば、現在でもその状態は続き、カトリック信者と仏教徒により構成されている。ただし人口は少なくなつており、本来カトリック信者が行なうことがなかつた、オーモンデーという念佛踊りを中学校で教えていたる状況なのだという。

(39) 前掲山階芳正「五島の人文地理」一五〇～一五一頁。

(40) 前掲山階芳正「五島の人文地理」一五二頁。また、山階芳正「五島の旧切支丹」（『民間伝承』十五巻四号一九五一年）では、五島の数あるカクレキリシタン集落の中から、樺島のカクレキリシタン集落である芦ノ浦の挿絵をつけ、紹介している。

(41) 平成十年（一九九八）八月、伊福貴集落にて筆者による聞き取り。

(42) 姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』、『切支丹禁制の終末』、『切支丹伝道の荒廃』、『切支丹迫害史中の人物事蹟』、『切支丹宗教文学』（姉崎正治著作集第一巻、第五巻 一九二六年～一九三三年 同文館 一九七六年 国書刊行会より復刻）。

(43) 浦川和三郎『切支丹の復活』（前編 一九二七年・後編 一九二八年 日本カトリック刊行会 一九七九年

国書刊行会より復刻）、前掲浦川和三郎『五島キリ

シタン史』。

(44) これらの資料をもとに、五島列島の末子相続、隠居慣

行についても研究され、竹田旦『民俗慣行としての隠居の研究』（一九六四年 未来社）、内藤莞爾『五島列島のキリスト教系家族 末子相続と隠居分家』（一九七九年 弘文堂）などの事例として大きな位置を占めている。

(45) 前掲古野清人『隠れキリシタン』一一一～一二三頁。

なお、文中に「外道」と呼ばれた、とあるが、これは久賀島や福江島などで、復活キリシタンに対する蔑称として用いられたと聞き、筆者自体は樺島点在集落の人々がこのように呼ばれたということを聞いたことはない。

(46) 煮干の加工以外にも、薪の販売、炭焼に利用するなどして、点在集落でも電線を引くための経費にしたこともあるという。点在集落では伊福貴、芦ノ浦、竹ノ浦で山の神祭りが行なわれていたことが伝わっており、竹ノ浦では現行の祭礼である。こうした祭礼は、山仕事に起因すると見られる。これをカクレキリシタンの方式で行っていた場所もあるようだが、山の神祭り自身は、地下集落・本窓の樺島神社境内でも行なわれてお

り、五島列島各地に見られる。内容の細目はともかく、

点在集落独自の行事ではないといえよう。

(47) その経緯については前掲村田裕志「五島列島・桃島のくらしと民俗——半世紀の変容——」五四—五八頁を参考照。

(48) この形式の鳥居や門は、五島の一部で見られたようである。

的野圭志監修の写真集『目で見る五島の百年』（福江市・南松浦郡）（二〇〇一年郷土出版社）には、昭和三十二年（一九五七）の奈留島・奈留村が奈留町になつた際の町役場の入口（七九頁）、中通島・奈良尾町の福音教会の祝日、教会に作られる祝門（八六頁）に同様の装飾が行なわれている。日ノ島では運動会の入場口に同様の門を作っていたという。樺島では祭礼終了以後、この鳥居の材料になつた杉を利用して、当時木船であった自分たちの船の船たでを行つていたといふ。

(49) 戰前は兵隊に行く人が優先的にその役になれたという。

しかし六尺になるにあつて、両親が揃つていない、嫁が妊娠している、喪中の家の人はない、といった禁忌があった。しかし三十年ほど前から島内の若者だけでは十六名程度の六尺をそろえることはできなくなり、島外に転出した島の縁者、小中学校の教員、あ

るいは桃島支所勤務経験のある若手の市職員に加勢をたのむようになり、そうした禁忌は、喪中の禁忌以外はその効力を弱めている。

(50) 元帳の合併は、桃島に限つたことではなかつたらしく、昭和三十年代に久賀島、福江島南河原、觀音平、三井楽などが連合した「八帳寄り」を形づくつていたとう。田北耕也「五島の切支丹」（片岡弥吉他編『切支丹風土記』九州編 一九六〇年 宝文館）三三九—三〇頁参考照。

(51) 赤尾俊重「桃島古キリシタン お帳預かり覚書」（一九八一年 福江島堂崎天主堂蔵）、同「一九八七（昭和六二）六月二六日桃島芦ノ浦クルワお帳箱」（一九八七年 福江島堂崎天主堂蔵）。これらは堂崎天主堂が、桃島の帳を保管する際、まとめられた文書である。

(52) 川上弥久美「五島桃島のかくれキリシタン」（『浜木綿』第三十四号 一九八二年 五島文化協会）、金川義人『殉教の神祕 キリストン研究書執筆姿勢へのお願い——私のささやかな抗議と怒り—— 第3回長崎旅行記』（一九八五年 出版経済研究所）、堀江克彦・松浦康之『キリストン街道——長崎・島原・天草・五島』（一九八六年 PHPグラフィックス）四六

～五五頁、Christal Whelan.1994."Japan's Vanishing Minority: The Kakure Kirishitan of the Goto Islands" Japan Quarterly。

(53) 的野圭志「[聖]ヨアン五島」とキリシタン宣教師福江渡来の「」（『浜木綿』第四号 一九六五年 五島文化協会）四一頁には、それまで五島列島出身としか明らかでなかつた彼の出身地を「樺島とも小値嘉とも云われてゐる」としてゐる。前掲赤尾俊重「樺島古キリシタン お帳預かり覚書」には、「芦ノ浦、長刀、焼山の元帳方たちが、その伝説を語つてゐる。ただしそのうちの芦ノ浦の帳方はその伝説を樺島で当時最も靈験があるとされていた法人から聞いた」といふ。

(54) 前掲川上弥久美「五島樺島のかくれキリシタン」が文献上の初出であるが、伊福貴の点在集落では古くから伝えられていたといふ。